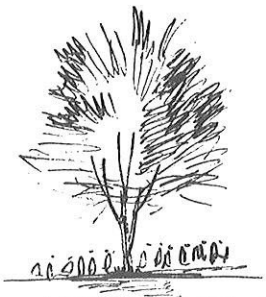
ひかりのこ

光の子



No.153　2012.6.15

●年間聖句　人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。
（ルカによる福音書19章10節）

「春の息吹」　挿絵・中島由起子

「鳥雲に」

おのづから吊橋はづむ芽木の谷
らんらんと夕空鶴の引きしあと
亀の鳴く頃かぎりと忘れ水
霞む山より埋骨の鉦の音
潜り戸のひつそり開く朧かな
老人の日尻濡れをり鳥雲に
よろよろと煙が立てり春の山

黛　執
（「春野」主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 加須市砂原277　印刷／プリンテング瑛和

養育と子育て

芹　沢　俊　介

いまからおよそ三百年前の江戸時代中期の医者、香月牛山（かづき・ござん）の書いた、我が国最初の体系的な子育ての本『小児必要養育草（しょうに・ひつよう・そだてぐさ）』を読むと、そこでは養育の文字に「そだて」とルビをふっている。

和語にある「そだて」に漢語の養育を当てているのだ。漢語の養育も育もともに和語の「そだてる」に当てられたものである。逆ではない。だとすれば、語源的にみるかぎり、子育てと養育を区別する理由はない。

もう一点注目していいのは、牛山が育てすなわち養育に、「教え（心得＝諭し）」と「生育」の二つの内容を含ませていることだ。両者を両輪として、牛山の『小児必要養育草』は成っている。

生育とは、出産時から生まれおちて後の、子どもの健康に対する注意である。そこには、へその緒の切り方、産湯の使わせ方、おっぱいについて、子どもに着せる衣類等、子どもが健康に育つための留意すべき点が記されている。

たとえば背中を暖かにせよ、腹を暖かにせよ、足を暖かにせよ、頭を涼しくせよ、胸を涼しくせよ、子どもの驚き怖れる類のものを見せるな、見知らぬ人に会わせるな、啼いているうちは乳を飲ましてはならない。離乳は基本的に歯がはえるのを待ってするがいい。二歳半（満一歳半）ころまでは乳を多く飲ませ、食を少なく、三、四歳（満二、三歳）までは食を多く、乳を少なく、五歳（四歳）よりは乳を飲ませないほうがいいと説いている。

また、こんな箇所がある。生まれた子に最初におっぱいを飲ます人を乳付け（ちつけ）といい、日本の風習であったといわれている。

さらにこう続けている。最初の授乳は乳付けがおこなっても、それは産婦に乳が出るまでのことであって、自然の道理からすれば、基本は母乳、産婦が健康であれば、母乳が出るのだから、出るようになれば母親にバトンタッチすべきとのこと。どうしても母乳が出ない場合にかぎって、乳母（めのと）を選ぶがいいと述べている。ただし乳母を選ぶにあたっては、子どもへの影響を考えて、やさしく心穏やかな人が望ましいと付け加えている。

こうした点からもわかるように、ここには強制というかかわり方が見られないことだ。強制よりも自然ということを基本軸に、穏やかな等身大の子ども中心主義の養育思想が展開されている。

このような子ども観が正反対の方向へと一変するのが、明治近代以降の天皇制国家主義の登場によってであった。

明治に入ると、富国強兵という国家目的に沿った、人材の育成が緊急の課題にのぼってくる。子どもは、それまでの家庭や共同体における「自然の子」であることを否定され、学校へと連れ出され、集団として、教育の対象となっていったのである。

現代の私たちの子ども観は、こうした近代以降の子ども観、すなわち自然の子であることの否定と教育の対象としての子どもの強調というフレーム、を依然として脱却できないでいることは指摘しておいてもいいだろう。

フェイスブックって何だ？

介護老人保健施設みゆきの丘施設長　仙道　富士郎

前回の「光の子」にフェイスブックのことを書いたが、またまたフェイスブックの話である。

前回のフェイスブックの説明と少し重なるが、事を整理するためにもう一回説明を試みる。

フェイスブックは七年前に当時ハーバード大学の学生だった、マーク・ザッカーバーグという青年が作りだした、インターネットを介して双方向性の交流ができるシステムである。友人同士が近況を話したり、イベントの開催を呼び掛けたり、多種多様な使い方ができる。北アフリカの民主化運動、いわゆる「アラブの春」で、フェイスブックを使ってデモを呼び掛けたことが、新聞報道されたこともあった。私たちもフェイスブックを利用して、被災地の子ども支援のプロジェクトを展開している。

ところが、四月十九日朝のNHKニュースに私は驚いてしまった。

会社の人事課が新入社員採用の資料としてフェイスブックの情報を利用しているという話。「面接ではトレーニングで、みな同じ優等生の返事しかしないから、応募者の実像を見るために、フェイスブックを利用して、どんな人間か調べておく…」。この辺までは、「なるほど、会社も考えるもんだ…」といった感じ。

ところが、その先がある。就活セミナーでは、採用試験に合格するための、フェイスブックの利用法を教えるという。いかにして、友達を増やすか云々。そして、就活中の学生は、その教えに従ってフェイスブックをうまく利用して自分のイメージを作り上げる。そして、入社試験に合格した青年の一人が、テレビ画面に向かって「フェイスブックの有効な利用は入社試験合格に大変役にたった」とおっしゃる…。

要するに、実情としては、フェイスブック上に会社が好むような偽りの自画像を作り上げて、それに会社の人事課の採用係の人たちが、まんまと引っかかった、という話である。

ここまで来て、私はぶっちぎれてしまった！

「この国は腐っている。」

なぜ私がぶっちぎれたか、それには訳がある。

今回の東日本大震災に関するマスコミのいかにも恣意的な情報流布に憤慨し、マスコミ嫌いになっていた私のまえに現れたのがフェイスブックであった。実名で、しかも基本的には自分の写真を載せて相手と語り合うシステムに、我が国を再生させる何かを求めようとした。フェイスブックを利用して革命を起こした「アラブの春」をなぞるということではないが、どうにもならない我が国の政治状況を人々の声で変えるための一つのtoolになりうるのではないかと思ったりしていたのである。

そんな折にNHKのニュースが流れて、日頃抑制心を失いがちな老人の心は爆発してしまい、フェイスブック上で長々と苦言を呈した。

ところが、運悪くというか、フェイスブックに良く投稿する方が、「就活のためのフェイスブックセミナー」を山形で実際開催していたらしく、フェイスブック上で、彼から猛烈な反撃を受ける羽目になってしまった。

いまでも、フェイスブックに書いたことは間違っていないとは思っている。しかし、良く考えてみると、フェイスブックが聖地であるわけもなく、利潤を生みだすためには、法に触れないことなら、いかなる手段も辞さないという資本主義社会の原則から、このシステムも逃れることなどできるはずもないのである。

フェイスブックでの年甲斐もない戦いに、疲労感を覚えているが、しつこいことを旨とする老人にしてみれば、おめおめと引き下がるわけにはいかない。ただ、今様の学生に苦言を呈したくらいで、事は改善されるわけもなく、いつまでも泣きごとを言い続ける結果に終わることは、見えている。私が今考えていることは、自分たちの力で、フェイスブックの素晴らしい利用法の樹立を目指すことが、この戦いの本筋であるということである。

実は、最近、Jef Corwinという方のフェイスブックページを見て感動した。そこには自然保護、動物愛護の主音が格調高く流れており、ページに投稿する人たちも含めて一つのハーモニーが作り上げられている。こんな人を感動させるページもあるのだと思った。

及ぶべくもないが、そんなことを目指しながら、このソーシャルメディアと付き合っていきたいと思っている。

「共育ちカンガルー日記」

（18）巣立ち

近藤みちる

三月最後の金曜日。山あいのアスレチック公園の水遊び場には、私とユキの他に人影はなかった。山から流れてくる沢の水はまだ冷たかったが、水が大好きなユキは裸足にズボンを腿までまくり上げ、ひとり大はしゃぎだ。桜の木の下にピクニックシートを広げると、私は腰を下ろした。お弁当と水筒、そしてたくさんの着替えを詰め込んだリュック。泥んこもずぶ濡れも覚悟で、今日は丸一日、とことんユキに付き合うと決めていた。

四月に入ると、ユキはA園という知的障害児通園施設に正式に入園する。児童デイサービスで週二回母子通園していた今までとは違い、毎日園バスで登降園し、長い時間私から離れて療育を受けながら園で過ごすことになる。

知的障害児が毎日通える療育施設はこの地域ではA園しかなく、人口三十二万人に対して定員はわずか四十名という狭き門である。ユキも年少からの入園は叶わず、待機児童の一人として結局一年間入園を待ち続けた。年末になって児童相談所から入園決定の連絡が来た時には、私も夫もそれはそれは、まるで娘が有名私立幼稚園にでも合格したかのような喜びようであった。

去年の春、同じ年のお友達がこぞって幼稚園に入園してしまうと、それまで通っていた公園や子育てサロンは赤ちゃんやよちよち歩きの子供達ばかりになり、私とユキには少しずつ居心地が悪くなっていった。児童デイサービスのないウィークデイには、誰にも気兼ねせずにユキと過ごせる居場所を求めて、いろいろな場所へと車を走らせるようになった。このアスレチック公園もその一つで、中でもこの水遊び場はユキの一番のお気に入りの場所になった。天気の良い日は、よくここに足を運んだものだ。

四歳を迎えた頃から、ユキにも遅ればせながら反抗期が訪れた。自我が芽生え、親の言うことにことごとく反抗するようになった。だがそれは、体の成長と共にユキの心が豊かに育っている証でもあった。物事をしっかりと見聞きし、考え、明確な意思を持つようになってきた一方、それを表出するためのコミュニケーション能力が追いつかない。ユキが言葉にならない思いを主張するために、大声を張り上げたり全身をばたつかせたりするのも、いたしかたないことだった。

だがそんなユキとの二人きりの時間を、私は徐々に負担と感じるようになっていった。この水遊び場でも、日が暮れようが雪が降ろうが水遊びを要求するユキに、さんざん手を焼いたものだ。大きな体で抗われるともう私の手には負えず、真冬に夜の八時まで水遊びを続けて、熱を出したことさえあった。

「ユキちゃんも、そろそろ温かくて居心地の良いお母さんの巣の中から外に出て行く時期ですね。」そんな私達を見て、療育センターの相談員は言った。確かに、私の巣はもうユキには狭くて窮屈になっていた。外に広がる大空を自由に飛び回りたくなったのだろう。案の定、A園の一日体験入園ではお友達や先生にたくさん遊んでもらい、すっかりA園が気に入った様子だった。翌朝から「Aえん、いく！」と毎日登園をせがむようになった。

夢中になって水遊びをしているユキの背中を眺めていたら、なぜだか胸に一抹の淋しさが湧いた。沢音、風の匂い、木漏れ日の揺らめき、そしてユキの笑顔。すべてが愛おしく感じられた。そして自分がどれだけ大切なものたちに囲まれていたのか、そのとき初めて気づいたような気がした。ふと、三年前にユキが卒乳したときのことを思い出した。あの時もユキは実に潔く乳離れを果たし、私の方は置いてけぼりを喰ってしまったっけ。ユキのそのたくましさが嬉しくもあり、淋しくもあった。初めて知った思いだった。親とはなんと切なくて、そしてなんと幸せな務めなのだろう。「ユキ、ありがとう。」あのときのように、私は心の中で何度もそう繰り返した。

そして四月。迎えた入園式は青空が眩しい麗らかな日となった。濃紺のブレザーにチェックのプリーツスカート、ピカピカの革靴。胸に新入園児のリボンをつけてもらったユキは、とても大人びて見えた。

式を終えると、ユキは元気な声で言った。

「Aえんできゅうしょくたべます！」

思わず涙ぐんだ私を振り返ろうともせず、ユキは春の光の中へ一人駆け出していった。その向こうにはどこまでも青い春の空が広がっていた。ユキの背中を見失わないように、私も勢いよく駆け出していくのだった。

子が立つて転んで風のひかりけり

みちる

訪問者

中島　睦雄

「電話なく　おとなう人もない日には　一人さびしく　コーヒーを飲む」

こんなさびしい日があるものである。

かと思うと、次から次へと用事のある人が訪れて、てんてこ舞いをすることもある。そして、そんな日に限って電話も入る。「資産運用のことですが…」とか「良いサプリメントのご紹介です…」などと。こんなこと、どちらも迷惑な話である。

しかし時には、楽しい気心の知れた訪問者もあって、それは嬉しいものである。

先日、趣味で絵を描いている丸山さんがやって来た。歓迎すべき訪問者の一人である。骨董市で絵を買ってきたと言う。それを見せてくれた。四号くらいの油絵である。横が三十三センチ、縦が二十二センチ程の静物画で、スケッチ板という板に描かれ、額縁はない。表面がかなりよごれていて、いかにも粗末に扱われていた、という感じであった。

これが簡単な紙の袋に入っていて、値段が何と九千円と書いてあった。丸山さんはこの絵を見た瞬間、良い絵だなあと思ったという。そこで骨董屋のおやじさんに交渉して、これ又何と四千円で買ってきた。

私はこの絵を見せられた時、あっさりと楽な筆さばきで描かれているが、なかなか良い絵だと思った。事によったら骨董屋のおやじさんは、絵のわからない人に違いないと思った。「この絵は、なかなか良い絵ですよ。まともに買ったら、とてもとてもそんな値段で買えるものじゃありませんよ。」と、いかにも鑑定家みたいな口調で言ってみた。丸山さんも「そうでしょう。これは安くは買えない絵ですよね。」と言う。

ピクチャークリーナーという油を使って、表面の汚れを洗い取ってみると、絵はたちまち生き返ってきた。下の隅に書いてあるサインも、はっきりと読み取れた。

「丸山さん、これは良い絵ですから、良い額縁に入れて、大切になすってください。」私は、テレビの鑑定家のマネをして、おごそかに、少しおどけて言ってみた。丸山さんも喜んで「そうでしょう？私もチッタア見る目がありますよね。」と大笑いである。

もち論、二人で飲んだコーヒーの味は、ひと味違っておいしかった。

また或る時、つい先だって、近所の人が見知らぬ女の人を連れてやって来たことがある。五十歳くらいのさっぱりとした人で、〝自然を見たい〟ということなのだそうであった。〝自然を見たい〟こういう気持ちは、誰でも少なからず持っているものであろう。

それがなぜ、私の家なんだろう。「最近は、どこの家でもきれいにして、住むには快適になってはいますけど、家のまわりの木もきれいに切ってしまって、草一本生えていないという家が多いんですよね。」とおっしゃる。ははー。私の家では、そんなに整然とはしていない。それどころか、木の枝は伸び放題、草は生え放題、草ぼうぼうなのである。これを〝自然〟というのかもしれない。

その女の人は、それ程広くもない庭を、庭？というより林みたいな中を、ゆっくりと見てまわった。「きれいですね。」とおっしゃる。そう言えば花はきれいである。赤やピンクの椿があっちこっちに咲き、黄色や白の山吹が無計画に。地面にはニホンサクラソウが。そして白いユキヤナギ。スズランのような白い花。黄色いスイセン。そんなものが、あっちこっちに咲いている。

「この木、すごいですね。」と手を触れる木は、太さの直径一メートル余のイチョウの木である。少し離れた所にあるタブの木は、やはり直径九十センチ余のコブコブだらけの大木だ。これらの木々も、何十年も手を入れずに伸びて、私の子どもの頃と余り変わりないように見える。

草ぼうぼうの中に乱れ咲く花々、それに大木。これが彼女の言う〝自然〟なのかもしれない。

そう、忘れていた。ギリシアから持って来たというアカンサス。青々とノコギリ状の葉を伸ばしている。古代ギリシア、ローマ時代のコリント式建築の柱頭を飾る植物だ。

こういう人達の訪問があると、私もさびしいどころか楽しくなってきて、それこそ「一人さびしくコーヒーを」飲まなくても済むのである。

「みんなで楽しく　コーヒーを飲む」。

プ・リ・ズ・ム

子どもたちの季節　仙道家

緑が美しい今日この頃。新年度を皆様はいかがお過ごしでしょうか。

今年度、光の子どもの家では各家のメンバーが替わりました。昨年度までは幼児の多かった仙道家ですが、今年度は一人も幼児がいないメンバー構成となりました。

引越しが終わり一週間が過ぎましたが、他の家に行った元仙道家の子ども達や職員とは家を行き来しながらよく話したり遊んだりしています。新しい生活がスタートし、不安な気持ちもある中、大変心強く感じます。また、子どもたちが離れてしまった事を寂しがっている姿は、情緒の成長を感じ嬉しい気持ちにもなります。

人との出会いや別れが多い中、その事に慣れずに一つ一つの出会いと別れを大切に出来るような感性をこれからも持ち続けて欲しいと思います。

和田　優右子

光の中で　佐藤家

入学シーズンとなり、そこ此処に初々しい新入生の姿をみかけるこの頃ですが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。佐藤家の子どもたちも新しい先生や友達との新しい人間関係に一喜一憂しています。

新しく幼稚園に入園した真理は毎日、元気に幼稚園に行き、楽しそうに帰ってきます。給食を楽しみにしており、みんなの分も持ち帰ってくるからねといいます。給食は持ち帰れないから、みんなの分もたくさん食べておいでという

と、元気にうなずいていました。

小学生の保奈美は新しく始まる理科の教科を楽しみにして、勉強に意欲を出しています。中学三年生で受験を控え、塾を利用する理奈は遅くまで勉強して、眠い、疲れたといって、帰ってきます。

そんな子どもたちをみて、私も子ども時代の新生活が始まる不安とわくわくした気持ちを思い出しました。子どもたちに負けないぐらい新しい事に挑戦していきたいです。

坂田　光一

原田家日記

新しい年度が始まり、子どもたちもひとつずつ学年が上がりました。入学した子どももいます。そして、家のメンバーも少し変わりました。

新しく職員となった工藤が担当する高校生早希、小学生の英恵と智司が前年度まで原田家だった和田グループと入れ替わりました。

中学生になった美貴は智司がかわいいようで、色々と世話を焼いています。おもしろくないのは小学生の大輝です。美貴のことが大好きなので、智司にやきもちを妬いています。

「智司、こっち来んじゃねえ。」

と意地悪を言ったり、叩いたりしてしまいます。その度に智司が泣き、

「大丈夫？」

と美貴がやさしく智司をなぐさめ、大輝は叱られてしまいます。

ますます大輝はおもしろくありません。美貴にかまってほしくて悪態をついて美貴に怒られ、

「大輝こっち来ないで。」

と言われてしまいます。

素直に甘えられず辛い大輝ですが、ここが踏ん張りどころです。学年は毎年毎年確実に上がっていくのですが、まだまだ充足していない内面を引きずったままです。

一緒に暮らしていく中で少しずつでも心があたためられていくといいな、と思っています。

池田　祐子

季節のおとずれ　竹花家

思春期真っ只中の要と美也子。それぞれに学校での友人関係や大人への批判、自分自身と理想とのギャップに日々格闘しているようです。私自身が通ってきた思春期の記憶を思い出しながら、彼らの思春期を見つめております。

様々な形で表現される彼らの心。時には学校の先生からこちらにお電話を頂くこともあります。校則や法律など守るべきルールを破ったり他人を傷つけたりすることは注意しますが、悶々と悩んでみたり反抗的な態度をとってみたりするのは、成長の証として寛容に受け止めようと意識しています。

外の世界に目を向けてみたら自分の許容できる範囲を超えたことばかりで、物事の本質よりは表面を批判的に捉える傾向にある思春期は、社会に目を向け始める時期でもあります。彼らがこの大事な時期を乗り越え、また一歩成長する日が来ることを望みながら寄り添い続けたいと思います。

鈴木　洋一

河のほとりで　倉澤家

今年度の倉澤家は小学生の広司、中学生の奈美、高校生の真祐、知香、そして昨年八月から職員として加わった細渕と私の六名でスタートしました。

広司は前担当者の退職により倉澤家へ。ここ数年、中高生女子中心だった倉澤家に久しぶりの男の子、しかも小学校低学年ということで、生活にも様々な変化があり、とても新鮮です。中高生のお姉ちゃんたちに囲まれ、末っ子ではありますが、彼は倉澤家の立派な長男です。名実共に倉澤家の長男となれるよう、これから鍛えて（？）いきたいと思っています。

もう一人、今年度からメンバーとして加わったのは高校生の知香。自立間近ということで倉澤家へやって来ました。知香の通う学校は、偶然にも今年真祐が入学した学校、同じ家に学校の先輩がいるということで様々な情報が入り、真祐にとっては心強いようです。二年生になり、周囲の者たちから、卒業後の進路について尋ねられることが多い知香ですが、今はまだ未定の様子。あせらずじっくり考えて、結論を出してほしいと思います。

倉澤家のメンバー一人ひとりが、疲れた心と身体をゆっくり休ませることのできる生活を目指し、子どもたちと一緒に楽しい生活を積み上げていきたい、そう思っています。

倉澤　智子

新任職員挨拶

新任職員の工藤久恵です。四月から原田家の一員となりました。大学生時代からボランティアとして光の子どもの家には大変お世話になり「がんこちゃん」と呼ばれていた私が、「久恵さん、工藤さん」と呼ばれる日が来たことを心から嬉しく思っています。

とても個性的で見ていて笑いの絶えない小学生の智司、しっかり者だけれど本当はすこしおっちょこちょいなところがかわいらしい小学生の英恵、環境が大きく変わりながらも楽しそうにその日あった出来事を話してくれる早希。毎日のように笑わせてくれる子どもたちを受け持つこととなりました。

四年間、「がんこちゃん」と呼ばれていたことは大きかったようで子どもたちからも、他の職員の方々からも「がんこちゃん！あっ、間違えた。久恵さん！」とわざわざ訂正してくださる姿に、「ここが私の居場所になっていくんだなぁ」と実感しております。卒園生の方々まで、「どう？元気？」などお気遣いいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。ゆっくりと「久恵さん」という私が、子どもたちの安心できる存在となりますように、寄り添って行けたらと思っています。

うっかり者で、一人の人間としてもまだまだ未熟な私です。職員の方々や子どもたち、光の子どもの家を支えてくださっている皆様にご迷惑をお掛けすることも多々あるかと思いますが、一歩一歩でも成長し、感謝の気持ちをお返しできたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

工藤　久恵

養護メモ 134

養育論の試み その5

隣る人

菅原 哲男

隣る人とは、児童養護施設光の子どもの家の養育に関わるキーワードである。

その語源は聖書、ルカによる福音書一〇章。善きサマリヤ人のたとえに由来する造語である。窮地に陥っている人を徹底的に受け止めて関わり、いかなる不利益を受け、危機に陥っても逃げないで関わりを継続する意志を持ち、行う人のことをいう。

児童養護施設は利用する子どもたちにとっていのちを継続し育っていくための最後の場所といえる。

このことばは児童養護施設光の子どもの家を立ち上げて、子どもやその家族と関わる中で、子どもたちが、またその家族が持つ負荷の膨大さと、それを担い切って問題を解決しようとする格闘の過程の中で、出会ったものである。

子どもたちは、全くの独りにされてやってくる。心も体も傷つき病を託っている。血まみれの心と体で泣くことさえできない状態で、ほとんど絶望して来るのである。

だから子どもたちにとっては、無人の荒野に放り出されたような孤独そのものなのである。

人は誰もひとりでは生きていけない。傍に誰かが居るから自らを感じ、自らの存在を確認することができる。

ところが子どもたちはまるで素数のようなあり方しかできない単数としての状態でやってくる。彼らのような「独り」の存在は他に探せないだろう。彼らが人になるには、隣に居続ける人が必要である。その必要を満たすために大人たちは光の子どもの家に集まる。

人の暮らしは輪切りにしてはいけないものである。だから光の子どもの家では責任担当制を選択して現在に至っている。三交替などはしていない。朝も昼も夜も丸ごと子どもを担当するのである。そうして単数だった子どもたちがもうひとりの人を得て人間になる。そのひとりがいつも隣に居続けることが児童養護施設のはたらきなのである。

先頃、数日にわたって忙殺される日が続いていた。現場のはたらきの不足を子どもたちに突かれ、支援者からの連絡が相次いだ。誕生祝いの招待など次々に対応が迫られたのだった。落ち着いて食事を楽しむいとまさえなかった。

そんなある日、追慕してやまない母親の大変な逸脱行為を告知した子どもを、大人たちは慰め励ましていた。子どもたちや職員たちを見回り、遅い食卓についた。

食卓におにぎりが二つ、飲み物などが整えられていた。その日は倉沢保育士が留守で、前夜から細淵が私と家を守っていたのだ。

テーブルのメモに「毎日忙しすぎて大変ですね。食べやすいようにおにぎりにしました。飲み物は…云々とあって、しまいに「菅原先生大好き！」とあった。

前夜からの息つく暇のなかった忙しさが吹っ飛んだ。くずおれそうな疲れがすーっと消えた。

彼女は二歳で、独りの小さな体にいっぱいの怒りを詰め込んでやってきたのだった。彼女の怒りは、自身のいのちを持続させることが難しいほどのものだった。どこへでも駆け出し、何でもしでかす。どろんこになり、傷の絶えない幼い日を重ねた。さいわい担当者との、長い関わりと担当者の実家との関わりなど多くの人々の心を集めて成長した。

光の子どもの家では、四歳から幼稚園に通園させて、小学校への準備をしてもらっていた。

職員会議で、幼稚園入園や小学入学を一年遅らせようと議論したほどであった。同じ年齢の子どもたちとの関わりを多く持つことで得られる訓練や関係を大事に考えて入園・入学していった。しかし、彼女の成長する力は相当のものだった。中学、高校を卒業する頃には普通に就職を考えられるようになり、何よりもよく気がつき、優しい対応が特性の女性に育ち、昨年九月から職員に採用した。

仙道富士郎理事が彼女を目にとめる度に、目を細め、あの子がねぇ、ここまでよく育つものだねぇ、と感じ入るのが常なのである。隣る人を得て人になる典型例なのだ。

思春期までに隣る人を得ることが養育の目標となる。

二七年にわたり隣ってきたつもりでいた私は、細淵に隣られっぱなしのこの頃なのである。

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

「今年の桜は遅いね。まだ四分咲きくらいかなぁ。」

「お花見は来週末にしようか。」

などとのんびり言っていたら、あっという間に満開となり、花の季節は終わりにさしかかりました。

皆様、お元気ですか。

諸事情により、大きく家のメンバーの変更があった今年度。

「チビばっかりだし、もしかしたら一人部屋になれるかも。」

と、ニコニコウキウキしていた理奈と丘実。

二歳の頃は私の布団で、小学校の頃も夜中に起きてからは私の布団で、中学生になっても、

「可弥が起きる前に自分の布団に戻らないと恥ずかしいよね。」

などと言っていた理奈です。就寝から目覚めるまで自分の布団で眠っていても、

「まり子さん、寒い。」

などと夜中に私を呼び（勿論、次の日の朝に言っても本人は覚えていません）、布団を掛け直してもらうようなことがあったのは、つい先日のことです。“大丈夫だろうか。あんなつぶやき声が壁一枚、ドア一枚の向こうから聞こえるだろうか…”など心配で仕方がない私。理奈にそれを言ったところ、

「そしたら自分でちゃんとやるよ。大丈夫だよ。」

と、ふくれっ面で言われてしまいました。

「そうだよね。そうなんだよね…」

理奈の年齢や成長、一つ屋根の下で一緒に暮らすことのできる残りの年月…などいろいろ受け入れて納得していなかければならない私はそう呟きながら、ふと、自分がここへ来ることを決心して父にその話をしたときの場面を思い出しました。

「何もそんなに遠くへ行かなくたって…」

と言うなり、寝転んでしまった父の背中を…。

そして、いくつか約束事を決めて一人部屋での生活がスタートしました。

「理奈、こんな恰好で寝てたよ。」

「ホント!?やだぁ、誰にも言わないでね。」

――相変わらずな会話ですが、確実に離れていっているのです。これから、私がしなくてはいけないことは何でしょう。してはいけないことは…。

以前、私の両親がここへ来たときの話をしていたときに、

「まり子さんは、お父さんとお母さんの宝物なんだよ。」

と理奈が言いました。私も、

「理奈だって、理奈のお父さんにとって宝物だよ。」

と言うと、彼女は“さあね”という感じで冷たく首を傾げただけでした。

「まり子さんにとっても宝物だよ。」

と重ねて言うと、

「それは知ってる。」

と、いつもの、ちょっとどこか抜けたような笑顔を見せてくれて安心しました。

公休のときなど、帰りが少し遅くなったりすると私の携帯電話を鳴らす理奈や丘実に、私は確実に世話をやいてもらっているのだなぁと思わせられます。面倒なこととありがたいこととは同じ泉のもの。お互い世話をやき合いながら活かされていく生活をつくっていきたいです。

もう新緑の季節が始まっています。

～『光の子』を読んで下さる方をご紹介下さい！～

皆様の厚いご支援により児童養護施設光の子どもの家は創立から27年が経ちました。
今後も「子どものための子どもの施設」という理念のもとで運営を続けるにあたりまして、「児童福祉施設最低基準」によって支弁される公費に加え、皆様からのご寄付が必須であります。
近年、一般のご寄付の減少が光の子どもの家の財政上、大きな問題となっております。
私たちの働きについてのご理解と、出来ますればご支援の輪に参加していただきたく、
光の子どもの家の機関誌「光の子」を読んで下さる方のご紹介をお願いいたします。

光の子どもの家を支える会　　代　表　大高晋一郎
社会福祉法人光の子どもの家　理事長　菅原　哲男

※連絡先（住所、電話番号、FAX番号、Eメール）は表紙下段に記載しております。

日誌抄　＝子どもと創る暮らしの風景＝　　２０１２年２月～３月

２０１２年２月現在
幼児８名　小学生１１名　中学生１１名　高校生６名　措置外２名　計３８名

７日　中学校との連絡会　大勢の中学生がお世話になっている　受験生も４名と多く学校との連携を強化　ご協力に心より感謝
１５日　小西剛史指導員が埼玉県施設内交換派遣研修で嵐山学園へ　県内唯一の情緒訓練短期施設の現状を知る貴重な機会
２２日　坂田光一指導員が埼玉県施設内交換派遣研修でホザナ園へ　他の施設を見る機会を子どもたちの利益へと還元する
２５日　加須市のパストラルかぞで行われた新垣勉さんのコンサートに招待され名が鑑賞　プロの声量に圧倒される　感謝
２６日　ハンドベルグループのグロッケンシュピールの皆様によるハンドベル演奏会　見たことのない大きさのハンドベルを実際持たせていただきその重さに驚く奥深いハンドベルの音色に感激　心より感謝
２７日　小学校との連絡会　年度末の連絡会で子どもたちの成長と今後の課題を確認しあう　日頃から大変お世話になっている先生方に心から感謝

３月
９日　埼玉県公立高校合格発表　全員が志望校合格の知らせに職員も子どもたちも喜んだ
１２日　合格お祝い会　受験生として精一杯頑張ってきた中学３年生たちに労いとお祝い　また新たなスタートに向けて激励
１７日　幼稚園卒園式　５名の幼稚園生が卒園する　お世話になった先生方に感謝を伝える　一人ひとりの成長を心から喜んだひととき
第１６回出発(たびだち)の会　浩伸と由子の自立に際してお世話になった多くの方々が共に祝って下さったこれからも応援し続けることを伝え彼らに寄り添い続ける
２１日　若月健吾牧師による職員礼拝　礼拝奉仕感謝
２３日　小学校卒業式　中学生となる美貴がこれからも自分らしく成長していけるようにと願う
２４日　第９７回理事会

〈２月３月の物品ご寄贈者〉
小田切未由美　森公子　狭山シャローム教会　大岩文江　斉藤直子　古川景子　島野常一　吉羽良美　杉山和俊　畑上育恵　松本明子　根岸亜麗朱　他多数の各位様
☆皆様のお支え心から感謝しております　今後ともよろしくお願い致します（洋）

反射光

☆小学生が青田の道をてくてくと歩いて通学しています☆今年も皆様に支えられ基準外職員確保のためのバザーを行うことができました☆天気予報では前日まで雨マークがついていたにも関わらず晴天に恵まれお客様の入りも上々☆おかげさまで売上総額５５７、４９５円となりました☆ご協力頂いたたくさんの皆様に心より感謝申し上げます☆去年児童福祉施設最低基準の一部が三十六年振りに改正されましたが抜本的な問題解決からは程遠い内容のものでした☆光の子どもの家は子どもたちが失った家庭での養育を家庭的処遇として追求し続けています☆できるだけ管理的な環境ではなく家庭的な環境をと考えると小規模化と人員配置の手厚さが必要になります☆そのため光の子どもの家の職員の数は基準より多くならざるを得ません☆光の子どもの家の理念に賛同し応援してくださる方々によってこのはたらきが成り立っています☆ご支援下さる沢山の方々のバザーへのご協力と長年にわたってのお支えやお祈りへの感謝を込めて子どもたちとの生活を日々丁寧につくる事を再度決意しております☆今後ともご支援よろしくお願いいたします☆　（洋）